

動物たちは元気いっぱい! アニマルトラッキング

冬、地面に雪がつもると、そこは真っ白なキャンパス。あちらこちらに動物の足あとが見えてきます。野生動物の足あとは、雪の上がもっとも見つけやすいから、冬こそアニマルトラッキングのチャンス! 足あととの特徴を少し知っておくだけで、姿はなくとも、動物に出会えたうれしさが倍増します。



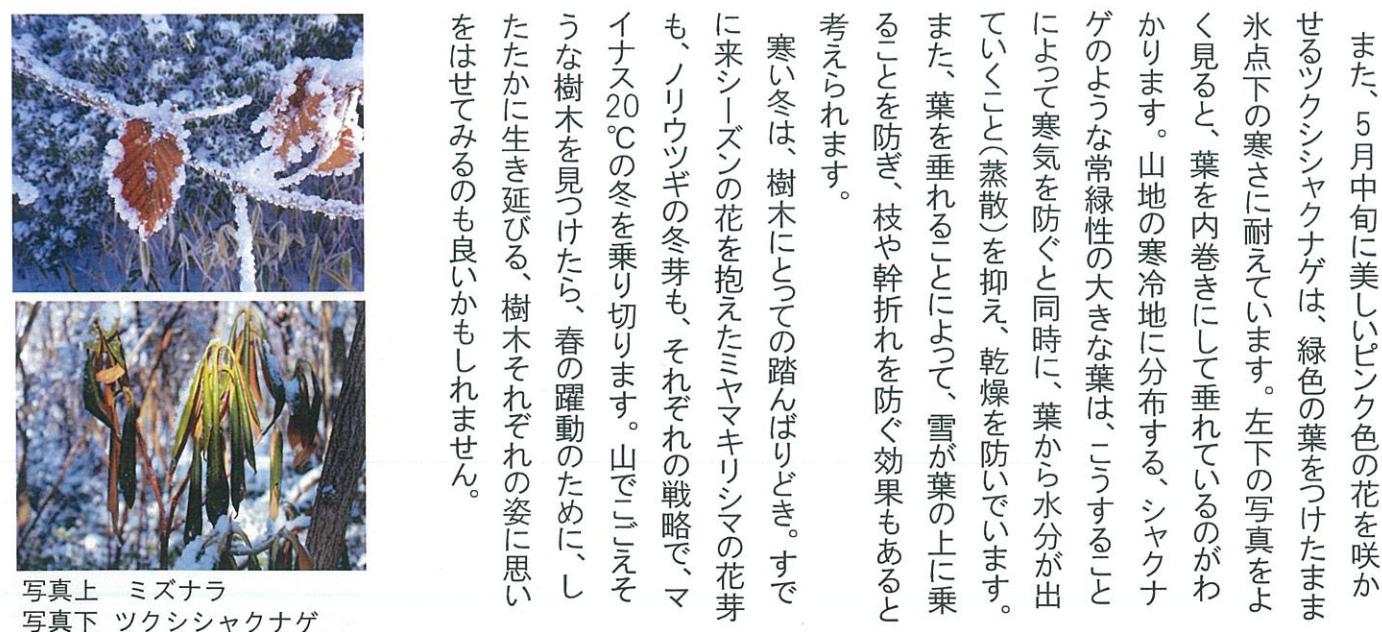
どこで見つける? 見つけやすい ポイント



▲12月 扇ヶ鼻分岐の手前付近。樹氷がびっしりついて、一面真っ白なサンゴのようになった。

冬のくじゅうは例年、11月中旬以降に初雪が見られ、時にはマイナス20℃を記録するなど温暖な九州にあって、雪や氷のロマンにあふれる『冬らしい風景』を見せてくれます。真っ白な霧氷や樹氷が人々の目を楽しませてくれる一方、ガチガチに凍った樹を見て、「こんな厳寒の中で吹きさらしになつていて…」の樹は大丈夫?!と思つてしまつとはないでしょうか?もちろん、樹木が、自生地で越冬中に回復できないくらいのダメージを受けることは、あまりありません。では、冬の樹木は、いつたいどのようにして寒さに耐えているのでしょうか?

まわりが氷点下になったとき、どんな植物も、体の細胞の中まで凍結してしまえば、ひとたまりもありません。植物は、厳しい寒さの中、体温が氷点下に下がることはあっても、体内の重要な組織や器官が凍結することを、いろいろな方法で避けています。例えば、左下の写真のように、樹氷がガチガチにいたミズナラの木はどうでしょうか。幹や枝の細胞は、春や夏に光合成でたくわえた「糖」の濃度を上げ、液体が凍る時の温度(凝固点)を低くすることによって、氷点下になつても細胞が凍らないようにしています。ブナやミズナラの場合、幹や枝の細胞は、マイナス30℃でも凍結しないといわれています。



冬のくじゅうは例年、11月中旬以降に初雪が見られ、時にはマイナス20℃を記録するなど温暖な九州にあって、雪や氷のロマンにあふれる『冬らしい風景』を見せてくれます。

また、5月中旬に美しいピンク色の花を咲かせるツクシシャクナゲは、緑色の葉をつけたまま水点下の寒さに耐えています。左下の写真をよ

く見ると、葉を内巻きにして垂れているのがわかります。山地の寒冷地に分布する、シャクナゲのような常緑性の大きな葉は、「こうする」というて寒気を防ぐと同時に、葉から水分が出ていくこと(蒸散)を抑え、乾燥を防いでいます。また、葉を垂れることによって、雪が葉の上に乗ることを防ぎ、枝や幹折れを防ぐ効果もあると考えられます。

寒い冬は、樹木にとつての踏んぱりどき。すでに来シーズンの花を抱えたミヤマキリシマの花芽も、ノリウツギの冬芽も、それぞれの戦略で、マイナス20℃の冬を乗り切ります。山で「こえそ」うな樹木を見つけたら、春の躍動のために、しだかに生き延びる、樹木それぞの姿に思いをはせてみるのも良いかもしれません。